講話

幼兒の心理的發達(五)

東京家政大學教授　山下俊郎

四、四歳兒の心理的發達

四歳すぎると幼兒の心理的發達はます〳〵めざましくなつて、どの方から見ても非常に活潑な心の動きが見られるようになる。ことに知的な方面のこゝろの動きはずい分活潑になつて來るのでアメリカの學者は四歳兒は「發見する」Find ing out 子供だと云つている。この四歳兒の心理的發達のありさまを、また四つの方面から一通りながめ渡して見ることにしたいと思う。

(1) 運動的發達

運動の發達は四歳兒になると一層いちじるしいものがあるので、幼兒たちの動きは非常に活潑さの度を加えて來る。ひろい庭へ出ると盛にかけまわる、すべり臺やブランコをめがけて突進する、という風に動きが大變はげしくなつて來ることが觀察されるのである。

このような動きのまず直接的な要素であるところの全身運動から觀察して見よう。階段をいきおいよく昇つたり降りたりする、すべり臺のはしごをよじ登る、すべり降りる、ジャングルジムに登り、降りる、というような活動は大體三歳兒頃の子供でも、半分位の子供には出來る。しかし四歳すぎてからが本格的の動きに入つて來るので、ます〳〵このような運動の力を幼兒達が身につけつゝあることが觀察されるのである。

このような全身運動の中には、手脚を動かす部分的な力のほかに、全身のバランスをうまくとるという大事なはたらきがはたらいている。そして幼兒達はこのようなバランスをとる事を必要とする運動をこの年令になると非常に喜ぶものである。このような動きをよくあらわすものに、スキップがある。スキップは普通の發達をしている子供だつたら四歳すぎたならば充分に出來るのが標準である。この年令になれば、

また幼兒たちはとぶことを大變よろこぶ。立ち巾飛び、走り巾飛び、いずれも拙いながらもやつてよろこんでいるのをわたくし達はよく見受けるのである。とぶことは四歳兒になると大部分の子供が出來る。ガッタリッヂの報告によると四歳兒の七二%は上手に飛ぶことを充分身につけている。して見ると四歳兒ではとべない幼兒の方が發達のおくれた子供だといわなければならない。からだの平均をとるということに興味を持つているこの年令の子供は、また片脚で立とうと一生懸命にやつて見る。しかし、これはまだ十分には出來ない。ちよつとの間だつたら立つていられる位の程度である。

この種のいわば平均運動というべきものにいわゆる平均臺渡りがある。古く、ボールドウィン、ステッチャー兩氏が行つた幼兒研究の中に、平均臺渡りを實驗的に調べたものがある。幼兒の平均臺渡りは五つの段階にわけられる。第一は、兩脚そろえて平均臺の上にのることの出來ないもの、第二は兩脚そろえてのるが、ふつうの歩き方では渡れないで、かにの横ばい式に横向きになつて脚をひきずつて行くもの、第三は、まつすぐに向いては歩くが、丁度二歳兒の階段昇りのように片方の脚はいつでも、もう一方の脚のあとについて行くという式のもの、第四は、右左かわりばんこに脚をふみ出して行くが、のろ〳〵と下手で、ときには脚をふみ違えるもの、第五は完全に兩脚を交互にふみ出して先ず大體はなめらかな動作で渡つて行くものという風に、五つの段階が認められるのであるが、この五つの段階の第一のものに一點、第二に二點、第三に三點、第四に四點、第五に五點という點數を與えて、各年令別の平均點を見ると上の表のような結果になつている。この表にあらわされている所を見ると、三歳兒と四歳兒との間にはずい分大きな開きがある。三歳兒は二・三點、四歳兒は四・二點である。これを言葉に直して見ると三歳兒はさきの第二段階即ちかにの横ばい式段階の近所にいるが、四歳兒はもう第四段階をちよつと出た所、即ちどうやら兩脚をかわる〳〵ふみ出せる所に迄發達しているわけである。このあたりの所に、四歳兒が、バランスをとるような運動に大變興味を持ち、そしてそれが可なり出來るように發達しているということが、數字の上にはつきりと示されているのを見るのである。

平均臺渡りの發達

年令	得點
2オ	——
3オ	2.3
4オ	4.2
5オ	4.8

全體的に考えて、全身運動は、二歳頃に於ける歩行運動の一應の完成から更に一歩ふみ出して、四歳頃までの間に更に一段の發達をとげ、今度はこの發達した運動を土臺として更に一層活潑な動きが幼兒の生活の中に展開されることによつて、大まかな筋肉をつかう大きな運動が身につけられて行くものであると考えられる。幼稚園時代に出來るだけ大きな動きを與えような遊具や遊びを考えた幼兒教育の先覺者ホールやヒルという人たちの卓見は新しい現代の心理學の知見によつて裏づけられている。

全身のバランスと、手先きの動きとの組合わされた形の運

動にボールを投げることがある。四歳兒はボールを投げるときに、いわゆる上手投げが出來るのが普通である。また大きな箱積木や序積木を運んだり、積んだりすることも同じような運動的要素を含んでいるが、四歳兒はこのような大きな積木を扱うことに非常な喜びを感じるものである。

次に、手先きの運動、いわゆる巧みさといわれる細かな運動について少し觀察して見よう。

四歳兒は、すでに三歳の頃に使えるようになつたはさみを使つて、色々の形の切り抜きをすることが出來る。正方形のお手本を見せると、これを模寫することが出來る。また、ひもを結ぶということも、固結びだつたら出來る。お辨當の風呂敷を結えることも固結びでたて結びだつたら充分に出來る筈である。勿論、敎えてやればたて結びでなくて當り前の結び方が出來るわけである。

運動的發達の間からながめた四歳兒の發達的特質をひろつて見ると、大體右の通りであるが、このような特質にしたがつて保育の實際問題が考慮されなければならない。

(2) 知的發達

知的發達に於て、四歳兒は最初に述べた「發見する」子供と言われていることに見られるように、更に一段と活潑な發達のようすを示している。

まず、數えることについて述べると、三歳兒では四つまで數えることが出來ていたが、四歳兒になければ、十三まで數えることが出來る。すなわち、十以上を數えることが出來るようにすゝんで來たのである。さらに實際的な思考力の發達の一つの面として、比較作用の發達が見られる。例えば、ビネー式のテストの問題に、同じ形、同じ大きさで、重さのはつきり違う二つの箱を幼兒の前に出して見せ、「どつちが重たいでしよう、重たい方の箱を渡して頂戴」という問題がある。三歳兒はこのような問題を出されたとき。たゞ箱を見ているだけで、比較するということが出來ない。ところが、四歳兒になると、兩方の箱を兩方のてのひらにのせて見るとか、代りばんこに持つて見るとかして、兩方の箱を比較して見て、重たい方を選ぶという、比較作用が出來るようになる。與えられた場面と問題に對して、これに應じた思考のはたらきがはたらくようになつた一つの面を示している。

次に、記憶の發達を示す事柄を觀察しよう。三つの數字、例えば三、六、八、というような數字を讀んで聞かせ、すぐその後、これをその通り言わせるということをさせると、四歳兒は充分な記憶（直接記憶という）を示している。また、三つの命令、例えば「この鉛筆を向うの机の上にのせて、あそこの窓をしめて、そこにある本を持つて來て頂戴」というような命令を出し、これをもう一度くり返して言う。つまり二度說明してやると、四歳の幼兒は、これをその通りに實行することが出るのが普通である。

知的發達の面で、四歳兒に於ける言葉の發達は注意さるべきであろう。その一つの面として先ず語いの量の上に大きい

發達のあとをわたくし達は見ることが出來る。久保良英博士の研究によると、二歳から六歳までの語いの數の發達は次の表のようになつている。一年毎の語數の發達量を見ると、三歳及び四歳の所、ことに四歳の所が一番大きい。即ち三歳から四歳の間に於て幼兒は一番たくさんの言葉を覺えるわけである。五歳、六歳になつて語いのふえ方がそれ程いちじるしくないということは、大體、四歳頃までの間に、幼兒は日常使う範圍の言葉を一通り身につけてしまうものであることを示すものであると言われる。このように考えると、四歳兒の言葉の教育に於てはこのようにして幼兒が身につけた言葉をさらに豐かにして、さらにしつかりしたものにしてやるようにするという方向がとられなければならないことが感じられるのである。

發達の語りの

年令	語い總量	年々增加量
2オ	295	—
3オ	886	591
4オ	1675	789
5オ	2050	375
6オ	2289	239

言葉の發達の中で、もう一つ四歳兒に於て注意しなければならないのは、發音の發達のことである。元來幼ない幼兒にはいわゆる舌のまわらない發音がつきものである。オサカナをオチャカナ、タクサンをチャクチャン、といつたり、コドモをコロモといつたりというようないわゆる赤ちやん言葉が多い。これは本來發達の低い段階では、一般の運動の發達が充分でないのと同じように、發音器官を動かすことが充分に出來ないことの現われである。ところでこの赤ちやん言葉は大體四歳から五歳の間には卒業するのが、一般の標準である。牛島義友氏等の研究によつて赤ちやん言葉を話さないで大體完全な發音をする幼兒の百分率を年令別に見ると次の表のようになつている。すなわち、四歳ではちやんと發音出來る幼兒は五〇%であるが、五歳になると九五・五%に達している。したがつて、四歳から五歳の間に大部分の幼兒は、ちやんとした發音をするようになり、赤ちやん言葉を卒業するわけである。このことは、外國の幼兒研究の結果でも、大體は四歳から五歳の間に、赤ちやん言葉はなくなるのが普通であるとされているので、日常生活のための道具としての言葉が、この年令に大體完成されるという所に精神發達全體の上から見ての大きな意味が認められることを示すものであると考えていゝであろう。

音の發達

年令	%
2オ	0
3オ	27.5
4オ	50.0
5オ	95.5
6オ	85.0

四歳兒の知的發達に於て次に注意すべきことは質問の發達である。一般に心理學者は三、四、五歳の時期を質問期と名づけている。四歳兒はまさに質問期のまつたゞ中に居るわけである。實に盛に色々の質問をする。從來調べられた多くの學者の研究によつて見ると、この時期の幼兒達の話す會話を丹念に記錄をとつて、統計的に分折した結果は、大體二〇%内外が質問によつて占められている。これ程質問が多いということは、幼兒達の心のうごきを示すものとして注目されな

ければならない。一體質問というものは、子供達の心が自分の生活している環境に對して眼を開いて來たことを示すバロメーターである。生れてから現在までも子供の身のまわりには雨もあり、風もあつたのであるが、これに對してほんとに心の眼が開けて來ない間は質問は起らない。眼が開けて來るとそこで「雨はどうして降るか」「風はどうしてふくか」という質問が出て來るわけである。質問期のまつたゞ中にいて盛に質問している四歳兒は、まさに心の眼が開けて氣て、環境に對して心が動きかけこれを探求しようとする知識慾の芽生えが盛に芽生えつゝある所である。質問は大切に取扱われなければならない。たゞし、質問はたゞこれに對してよく答えるということでは決していゝ態度だとは言えない。むしろこの質問を通して外の世界に對して活潑に動いて來つゝある子供達の心が、もつと積極的に動いて知的發達の道を進んで行くことが出來るようにする爲には、質問をきつかけとし、これをふみ臺として、觀察の心がすすめられ、經驗の深さが深められて行くように工夫することが心要であろう。

知的發達に於て、四歳の思考力を觀察する一つの例を最後に擧げて見よう。上に掲げた圖のようにS字狀に曲げた針金のかぎを兩端に持つひもをコップの柄の所に通して、ひもの兩端のかぎを椅子の背の所にひつかけて置く。そして、「そのコップをとつて頂戴」という問題を幼兒に出す。その解決は、S字狀のかぎを椅の背から外し、これをコップの柄の中をくゞらせてコップを外せばよろしいわけである。この解決は、いうまでもなく、椅子とかぎとひもとコップというこの四つのものゝ關係をはつきり觀察し、見きわめた推理によつて到達し得られるものである。このような具體的思考能力の段階が四歳兒に於ては期待されるのであつて、三歳兒に於ける段階と比較して見ると、その發達的意義がはつきりとつかまれるであろう。

四歳兒の知的發達は以上眺めて來たように非常な進展を見せている。後に開けて來る知的な精神生活の第一準備期とも考えられるが、むしろこれを遙かに豫想しながらこの時期はこの時期として幼兒的な活潑な知的生活が展開されている意味に於てまさに「發見しつゝある」幼兒の時代であることをわたくし達は注意しよう。

戸　棚　學級支庫、圖書室、教材陳列棚等學校必需の備品である。

机　椅　子　教授用、事務用として學校必需の備品である。

用　紙　除外規定中新聞用卷取紙の次に教科書用教育用を追加されたい。